

# 無観客リアルタイム 有料配信公演、やります!

2020年12月4日(金)・6日(日)  
損保ジャパン人形劇場ひまわりホール

新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて、ひまわりホールが事実上の休館状態となり、今年度の愛知人形劇センター主催事業共催事業のほとんどが延期・中止となっています。そこで愛知人形劇センターでは、文化庁の「文化芸術活動の継続支援事業」補助金を活用し、子ども向けと大人向けの人形劇を無観客リアルタイム有料配信上演します。

ライブストリーミング配信  
「TwitCasting〜ツイキャス」  
にて配信します。

ONLINE



人形劇団むすび座  
『あかちゃんゴリラのゴリゴリ』  
作：和田周子  
演出：いわいだひろえ  
助演出：太田博己  
美術：工房太郎  
音楽：大野栄潤

子ども向け

●あらすじ  
ジャングルに住むウサギのウサじいは、迷子のあかちゃんゴリラ「ゴリゴリ」を見つけます。大泣きをしているゴリゴリを抱き上げると、ゴリゴリはピタッと泣き止みました。「どうやらわしが気に入ったようじゃ」。さあ、その日からウサじいの子育てが始まります。あかちゃんゴリラのゴリゴリが森の動物たちに支えられ、元気に育つ姿を描きます。

12月6日(日) 14:00  
人形劇団むすび座  
『あかちゃんゴリラのゴリゴリ』  
700円

●メッセージ  
こんにちは。人形劇団むすび座です。「人と人とをむすびます。子どもと子どもをむすびます」をモットーに、1967年の創立以来、楽しい人形劇を届け続けています。ひまわりホールでは例年7月と年末年始に人形劇を上演してきましたが、今年はコロナ禍で直接皆さんにお会いすることができなくなってしまいました。そこで、少しでもむすび座の人形劇を楽しんでいただきたいと思い、この度、愛知人形劇センターの主催で、人形劇の生配信をすることになりました。お届けする作品は『あかちゃんゴリラのゴリゴリ』。むすび座のオリジナル作品です。どうぞお楽しみください。



12月4日(金) 19:00  
ラストラーダカンパニー  
『竜潭譚』  
2,500円

ラストラーダカンパニー  
『竜潭譚』  
原作：泉鏡花  
浄瑠璃台本・演出：木村繁  
美術監督：福永朝子  
ちさと人形製作：はちす  
出演：常磐津網鵬 古家暖華 LONTO

大人向け

●あらすじ  
幼くて母を亡くした「ちさと」は、姉のいましめを破り、つつじの咲く山へ遊びにいきます。ちとさは毒虫に刺されて顔が腫れ、姉が探しにきますが見聞違えます。ちとさは隠れ里に迷い込み、亡くなった母によく似た美しい女に逢い、女は子守唄を歌ってくれます……。

●メッセージ  
『竜潭譚(りゅうたんたん)』は三味線の弾き語りによって人形芝居を進行していきます。こういった形式を人形浄瑠璃(じょうるり)といい、それはこの国の人形芝居の原型でした。その形式は今も文楽に脈々と継承され、海外でも高い評価を受けています。一方、今日の多くの人形劇では、人形遣いがセリフと一緒に言うのが普通になっています。そんな中で、わたしたちは物語とセリフは三味線弾き語り担当し、人形遣いはもくもくと人形を操る方法を選択しました。けれどもわたしたちは昔の形を復元しようとしているわけではありません。語りと人形を分けることで、舞台上に思わぬ緊張関係が生まれることが多々あります。又、三味線の糸の音と語りは、セリフ劇とは又ちがう、音楽的で、ちょっとオシャレで、感性を刺激する、豊かなことばの贈り物をお客様にお届けできることでしょう。若き邦楽界の女流奏者、常磐津網鵬(ときわづつなほう)と、マイム、俳優陣からなる異色の人形遣いの競演にご期待ください。

木村 繁(浄瑠璃台本・演出)

## ひまわりホール再開のご案内

新型コロナウイルス感染拡大に伴い休館となっていた損保ジャパン人形劇場ひまわりホールは、現在「無観客上演利用」でのみ利用を再開しています。ライブ配信が可能なインターネット高速回線及びライブプロダクションスイッチャー・ライブ配信ユニットをホール付属設備機材として配備しました。利用の詳細については、[mail@aichi-puppet.net](mailto:mail@aichi-puppet.net)までお問い合わせください。



# Report みんな、今どうしてる? ～コロナ禍の芸術活動最前線～

未曾有のコロナ禍において、劇場や芸術団体は少しずつ動き出しています。おりしも本誌編集集中に各種文化施設の入場規制緩和が発表され、9月19日からほとんどの舞台芸術公演で100%の集客が可能となりました。しかし、それは数字上、制度上の問題。いきなり平常に戻るわけではありません。舞台芸術の現場は今どうなっているのか、誰もが気になる場所です。そこで「あっぷ」編集部は東海地方の劇場と芸術団体4カ所に突撃取材! 少しでも情報共有の場になることを目指します。

## 愛知県芸術劇場

浅野芳夫副館長が対応してくださった愛知県芸術劇場では、自主事業でも貸し館公演でも同じルールを徹底し、消毒や検温の実施はもちろんサーモグラフィーや抗菌コーティングなどホール使用者と共用できる感染防止対策を充実させています。特に抗菌コーティングは初期費用こそかかりますが、長い目で見れば消毒液などより経済的なんだとか。なお、導入にはノロウイルスやインフルエンザに対する効果を参照。いま考えられる最善策ということですよ。

劇場内ツアーやオルガンコンサートの動画配信も行っていますが、生の舞台を観に来てほしいという想いに変わりなし。今こそ運営能力やセンスが試されていて、県内市町村のホールとの連携も含め、新しい劇場の在り様を切り拓かなければいけないと浅野副館長は考えています。コロナ禍の教訓を後世に伝える責務も意識しながら、いつか芽吹く時を信じて、愛知県芸術劇場は黙々と文化の大地を耕しているのだと感じました。



館内はすべて抗菌コーティング済み



体温を感知するサーモグラフィーは、ホール使用者への貸出も行っています



エレベーター内にもソーシャルディスタンスの目印あり



浅野芳夫副館長



フェイスシールドを着用しながらの検温風景

## ナビロフト

劇場プロデューサーの小熊ヒデジさんが運営するナビロフトは7月、「ナビロフトplus」と題して連続イベントを行いました。オープニング企画『JAPAN#31プロジェクト』にはじまり、公開図画工作「すずめ、うれしめ」、トークライブ「コロナ「渦」からの出航」、星の女子さん+ナビロフト/仮面劇「ハハチチ」の4公演は、定員半数以下とはいえほぼ満席となり、観客の関心の高さも実感できました。ただ、ナビロフトplusは劇場が動いていることを広くアピー



星の女子さん+ナビロフト/仮面劇「ハハチチ」公演の様子。小熊ヒデジさん(右端)も女性役で出演しました。



公開図画工作「すずめ、うれしめ」の様子



トークライブ「コロナ「渦」からの出航」の様子

## 人形劇団むすび座

話をうかがったのは座員で愛知人形劇センター理事でもある藤中智光さん。むすび座は自主事業はまだ開催できないものの、保育園や幼稚園には訪問しており、9~11月に予定されていた学校鑑賞会も実施予定。運動会などの行事が中止になった代わりに鑑賞会は決行する園や学校もあり、子どもたちが少しでも豊かな体験を得られるよう、取り巻く大人たちも前向きです。そのため先生方とは座席表の確認など今まで以上に連絡を強化。定員が減る分、公演回数を増やすことで多くの子どもを受け入れる一方、長時間を避けるため従来2本立てのところを1本に変更することにも臨機応変です。また、保育園と幼稚園の行政管轄が異なるため、各ガイドラインへの対策にも苦慮。その上で、子どもたちが不安なく最後まで楽しめる環境づくりに注力しています。その甲斐があり、帰り際、遠くから手を振りながら見送ってくれる子どもたちの笑顔が藤中さんたちの原動力になっているようです。



保育園での鑑賞会の座席



藤中智光さん

## Puppet Theater ゆめみトランク

ゆみだてさとこさん率いる「Puppet Theater ゆめみトランク」の活動状況は、同カンパニーの制作で愛知人形劇センター事務局長の中康彦さんに尋ねました。写真は直近の9月に東三河の生涯学習センターで行われた親子向け鑑賞会の準備風景です。この時は、舞台芸術の現場における感染防止対策を巡って主催者側とアーティスト側に認識のズレがあり、出入り口や窓を開放し、自然光のもとで公演が実施されることとなりました。このような空間では、空気の流動で舞台美術が倒れたりする可能性があり、また照明効果も意味を持ちません。上演した『URASHIMA』はノンバーバル(非言語)の作品ですが、念には念を入れてマウスシールドも着用。それでも結果的には互いの考えが食い違ったまま幕を閉じることとなったそうです。主催者もアーティストも本来、観客が最も満足できる状態で作品を提供するのがベスト。コロナ禍では、意思疎通だけはより密に行う必要が発生しています。



喚起を促すため扇風機3台フル稼働!!!



出入り口の扉や窓を開放した、異例のスタイルで公演を敢行



中康彦さん

みなさんから口々に述べられた最大の課題は、感染拡大防止の科学的根拠が示されていないことです。9月19日付で歓声・声援を伴わない公演は100%までの入場を認められましたが、裏を返せば各自の判断、自己責任ということ。今後は、劇場の構造、感染症の理解を巡る地域ごとの温度差、主催者の方針などによって観客への対応が異なり、混乱を生じる可能性もあります。そんな問題に立ち向かう意味でも、公立・民間・個人・法人を越えた舞台芸術の新しいネットワークが構築できないか、考えさせられました。

取材後記

WITH CORONA